

## 【報 告】

## 現代に求められる教養と実践力を有する保育専門職を育てる 基礎教育の構築

平成 23 (2011) ～ 25 (2013) 年度和洋女子大学教育振興支援助成成果報告

関山邦宏

Foundation of basic education for fostering a professional childminder who is  
well cultivated and practical requested for the present

Kunihiro SEKIYAMA

### 要旨

本共同研究は、開設間もない「こども発達支援コース」にあって、教員と学生に共通する課題であった学生が子どもと実際にふれあって学ぶ実践の場や、卒業生・上級生の保育実践を受け継ぎ新たな工夫を加える機会などを早急に構築することを目指して、平成23年度から3ヶ年にわたり実施した。

学生は、各授業間の連携によって多様な表現活動に取り組むとともに、大学祭等の機会における子どもとの体験的交流や地域での発表会、プロ劇団の観劇などをとおして表現の実際を具体的に学び、各自の体験を深めることができた。また学内に子どもを招いて、ゲームや物作りを楽しむ企画・実践をしたことにより、学生が子どもと体験を共有することができ、座学を実践へと転換・応用する機会となった。実習体験報告会は、同級生間の省察に止まらず、上級生から下級生へ保育の場の具体的イメージの伝達や異学年間における情報の共有ができることを示している。

3年間の継続的取り組みにより、授業間・教員間・異学年間の連携の仕組みを構築するとともに、①より実践的な学びの場の拡大、②学生個々人の生活力・コミュニケーション能力・保育技術の向上、③明確で具体的なキャリア志向の形成、を図ることができた。

**キーワード：**保育専門職 (professional childminder)、保育技術 (techniques for childminder)、表現力 (power of expression)、コミュニケーション力 (ability of communication)

### 1 はじめに

和洋女子大学人文学群心理・社会学類人間発達学専修こども発達支援コースは、平成20 (2008) 年4月に開設された (入学定員50人)。本コースは、平成20年度より幼稚園教諭、翌21年度より保育士の養成を始めた。当然のことながら、学生は、卒業生や上級生から話を聞く機会は乏しく、また附属園もないことから子どもと実際にふれあって学ぶ機会は限られたものであった。

本コースは、「人に対する優しさと専門的知識 (教養)、まめやかな心遣いと行動力 (実践力) とを備えた保育者養成を目指」すカリキュラムの一部見直しを行い、平成23年度から実施した。しかし、「実践の

場での協同的な活動と実習経験の伝達ができなかった学生たちに、先輩の実習体験を伝え受け継ぐ機会と、協同的な活動で子どもたちとふれあう機会」を構築することは課題として残されたままであった。そこで、本コースは、「現代に求められる教養と実践力を有する保育専門職を育てる基礎教育の構築」をテーマとして、3ヶ年にわたる共同研究計画を立てて、課題解決を図ることとした。

1年目の平成23年度は、学生は1年生を中心に保育現場に結びつく教養と表現力の基礎を構築する期間と位置づけて学内・学外で諸活動を行った。2年目の平成24年度は、前年度、育成に力点を置いた学生の表現力について、学生自身が現場で実践し、さらにその学びを振り返り、学びの質を高めるとともに、上級生から下級生へ実践体験を伝える場を構築することに重点を置いた取り組みを行った。3年目の平成25年度は、本取り組み開始時の入学生が一連の実習を終了し、中心学年となる年であることを踏まえて、学生個々人のスキルアップをねらいとした実践の機会の拡大と上級生から下級生への伝達を重視した取り組みを行った。この3ヶ年にわたる継続的取り組みにより、授業間・教員間・異学年間の連携の仕組みを構築するとともに、①より実践的な学びの場の拡大、②学生個々人の生活力・コミュニケーション能力・保育技術の向上、③明確で具体的なキャリア志向の形成、を図ることができた。ここに、3ヶ年の取り組みの実際とその成果について報告する。

なお本研究「現代に求められる教養と実践力を有する保育専門職を育てる基礎教育の構築」は、平成23～25年度の3ヶ年にわたり和洋女子大学教育振興支援助成を受けて実施した(平成23年度1,748千円、24年度1,012千円、25年度1,223千円)。

## 2 研究計画の概要

ここでは、本研究の組織、研究目的と内容、年度計画の概要について、「和洋女子大学教育振興支援助成計画書」に基づいて述べることとする。

### (1) 研究組織

本課題の研究は、以下の、こども発達支援コースの7名の専任教員が参加し、それぞれ役割を分担した。

代 表	関山 邦宏	(教授)	研究統括、教育コーディネーター
研究員	鈴木 みゆき	(教授)	渉外(幼稚園、保育所)
研究員	太田 光洋	(教授)	渉外(地域)
研究員	前田 泰弘	(准教授)	渉外(施設)
研究員	島田 由紀子	(准教授)	授業連携コーディネーター
研究員	駒 久美子	(助教)	表現連携コーディネーター
研究員	大神 優子	(講師)	教育コーディネーター、事務局

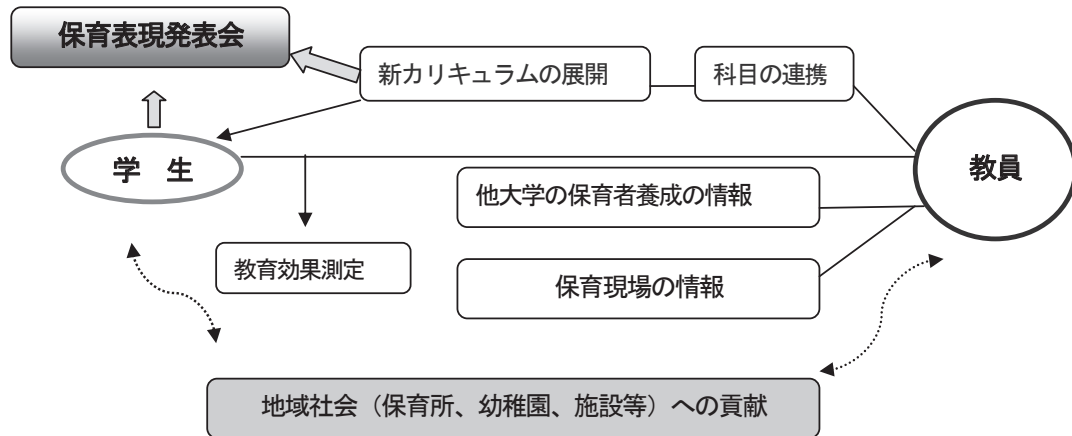
### (2) 研究目的・内容

研究の目的は、以下のように設定した。

こども発達支援コースでは、人に対する優しさと専門的知識(教養)、まめやかな心遣いと行動力(実践力)とを備えた保育者養成を目指している。保育者に求められる知とは、保育に関する理論を基礎としながら「其の人の直接の経験に立脚し、暗黙の知識に基づく洞察を生み出し、その人の信念と人間関係により形作られる強力な専門的知識」へと昇華していくものである。だとすれば、保育に関する知識はもちろん、広い教養や信念、経験を通しての学びが不可欠であろう。そこで、こども発達支

援コースの全教員による組織的な取り組みとして、①保育の質を高める教養と実践力を育てる学びの機会と場を創る、②学生や保育者に指摘される生活経験の不足やコミュニケーション能力の弱さ等の課題を克服する、③より明確で具体的なキャリア志向を育てる、の3点から、教養と実践力のある保育者を養成する教育の充実を図る。

以上の取り組み構想を図示すると、次のとおりである。



この目的を達成するために、次のように具体的研究内容を設定した。

上記の目的を達成するために以下の3つの学びを保証する。いずれの教育的取り組みも、こども発達支援コースの教員が学生とともに活動し、教員と学生、保育・子育て関係機関を含む地域社会との相互的な関わりを保ちながらすすめることを特徴とする。

- ① 子どもや保育に関するアクチュアルな問題を追及し、その問題について学ぶために広い領域から能動的に学ぶ。
- ② 自分の力を発揮し、地域社会（保育所、幼稚園、子育て支援機関などを含む）に貢献しながら、自らの実践と省察、フィードバックの積み重ねを通してよりよい実践を構築する「反省的実践家」として学ぶ。
- ③ 仲間や教員、地域社会の方々と協力して活動に取り組む中で対人的能力を高め、自分自身の体験を仲間と共有する協同的な学び体験を重ねて育ちあう。

### (3) 年度計画

本研究は、平成23～25年度の3ヶ年にわたって実施することとした。各年度の実施計画は以下のとおりである。

#### 【平成23年度】

本年度は、教員による情報収集、情報の共有や連携、評価方法の検討期間とし、学生は1年生を中心に保育現場に結びつく教養と表現力の基礎を構築する期間と位置づけ、2年生以降の学内外での保育表現発表会（音楽、図工、体育、劇あそびなどの表現）の準備期間とする。特に音楽や造形、劇あそびについては、学生自身の経験が少ないため、外部講師を招く、公演を観に行くなど、表現について幅広く学べるプログラムを実施する。また、課題の取り組みの結果をリーフレットにまとめる。

#### 【平成24年度】

本課題の取り組みの中間発表として、学生は「保育表現発表会」を学内で開催する。上級生から下

級生へ実習体験を伝える場、下級生は上級生の表現や実習体験の発表から、今後の学びや将来のビジョンを明確にする機会となり得る。同時に、発表会の冊子などを学生自身がつくり、これまでの学びをまとめ、確認する。学生同士が協力し合い、教員がサポートすることで、学年を超えてこども発達支援コース全体の教育力を高めることにつながる。教員は、「保育表現発表会」の取り組みを中心とした記録をリーフレットにまとめる。

#### 【平成25年度】

教員による課題の取り組み、および学生の学びや各実習での体験、「保育表現発表会」で得た知識や保育技術を発展させ、地域社会（保育所、幼稚園、施設、子育て支援機関等）に広く貢献する。幼稚園や保育所等と、学生や教員を連携させ、要望に応じて、学生が保育現場へ出向く、あるいは子どもや保護者、幼稚園児、保育園児等を大学に招くなどの体験的な交流を図る。教員は、学生が授業実習、発表会等で蓄積した保育者としての専門的知識と行動力を、保育の場で実践し、省察、フィードバックするプログラムの完成を目指す。また、学生による地域貢献プログラムの記録を中心としてリーフレットにまとめる。

### 3 課題解決に向けた取り組みの実際

ここでは、各年度における主立った取り組みについて概略を述べることにする。なお各取り組みに対する学生の感想を併記して成果評価の一助とする。

1年目の平成23年度は、1年生の表現力育成の基礎を構築する期間と位置づけ、学内・学外で以下の取り組みを行った。学内では、2年生を6グループに分け、各グループが「大きなかぶ」「オズの魔法使い」「サウンド・オブ・ミュージック」などを題材に、音楽、美術、ダンス、衣装などに独自性を加えて脚本の作成と振り付けを行い、授業で学んだ知識・技術を総合した「表現発表会」を行った（11月）。学生の感想に、「どうしたら子どもたちにわかるように10分でまとまるか、どの表現、言葉づかいが子どもたちに伝わりやすいかななどを考えながら台本をつくり、劇にしました。」（M.M.）、「みんなで一つのことを成し遂げる達成感、責任感、周りを見ることなどたくさんのかことを学べた。」（M.U.）、とある。

また、幼稚園・保育所・施設での実習について、3年生がポスター発表形式で「実習体験報告会」を行った（11月）。実習未経験の1・2年生からは、「はじめは不安だった私ですが、この体験発表会に参加し、実習を楽しみに思う気持ちが芽生え始めました。はじめから失敗すること、うまくできないことを恐れるのではなく、堂々と学びにいかうと今では思えます。」（M.A.）、「実習発表会に参加して、実習に対しての不安や悩みが減りました。また、実際に聞いてみることで自分でどういった保育をしようなどの目標もできました。先輩達の体験を参考にして実習を頑張りたいと思います。」（H.I.）、と感想が寄せられている。

学外では、地域子育て支援施設に出向いて、手遊び、絵本の読み聞かせ、オペレッタ、劇などの発表を企画・実践した（6月、12月）。また、勝れた取り組みを行っている子育て支援機関や保育所の視察・見学（12月）、「東京おもちゃ美術館」（東京都新宿区）での研修・見学を行った（1月）。参加学生からは、「保護者の方ともお話しができたり、小さな赤ちゃんを抱かせていただいたり、貴重な経験ができた」（C.K.）、「園長先生の話から、先生同士で思いを共有したりすることで（事例を発表するなど）信頼関係が深くなっていき、お互いに成長していくということがわかりました。」（E.U.）、「おもちゃ美術館では、私が今まで考えていた『おもちゃ』の概念が変わりました。ただ面白いだけではなく、素材にこだわっていたり、見て楽しんだり、感触を楽しんだり等、新しい『おもちゃ』の楽しみ方を知りました。」（A.Y.）、と感想が寄せられている。



こうした一連の取り組みを進めることにより、学生は各授業間の連携による多様な表現活動に取り組むとともに、大学祭や地域での発表会などの機会をとおして子どもや新たな教材に触れることができた。さらに複数学年合同の取り組み「実習体験報告会」を行ったことにより、実習前の1・2年生が保育の場について具体的イメージを学ぶことができた。これらの成果として、①より実践的な学びの場の拡大、②学生個々人の生活力・コミュニケーション能力・保育技術の向上、③明確で具体的なキャリア志向の形成、を図る端緒を得ることができた。

2年目の平成24年度は、前年度、育成に力点を置いた学生の表現力について、学生自身が現場で実践し、さらにその学びを振り返り、学びの質を高めることに重点を置き、構造的・組織的な取り組みを行った。主な取り組みは、以下の7点である。①2年生は、「白雪姫」「ピーターパン」などを取り上げてオリジナル台本を作成しての表現発表会の企画・実践を行った（12月）。②複数学年合同で、ポスター発表形式による「実習体験報告会」を行った（11月）。③複数学年合同で、里見祭（大学祭）に近隣の幼稚園・保育所・施設の子どもたちを招いて、ゲームや物作りを楽しむ企画・実践を行った（11月）。④現職の保育者、母親等による講演会を開催した。⑤市川市立市川保育園での劇、手遊び、絵本の読み聞かせなどの企画・実践を行った（6月）。⑥柔軟なアイデアのもと豊かな表現で魅せる「劇団風の子（東京）」による公演を観るとともにワークショップに参加した（3・4年生）、⑦保育に関わる施設として東京おもちゃ美術館・国立科学博物館を見学した（1・2年生）。総じていえば、学外での実践及び保育現場からの要請に応える力量の形成に、より力点を置いた取り組みを行った。

こうした取り組みに対して、学生は次のような感想を寄せている。①について、「実際に一つの劇を創ってみて、私達学生がやるのにも大変だったので子ども達と一緒にやる時は配慮や工夫などが必要になり、もっと大変なのかなと思いました。しかし同時に、子ども達にも私が味わった様な完成した時の達成感や喜び、新たな発見や楽しさを経験して欲しいなと思いました。」（2年生。A.A.）、「今まではたくさん小道具や大道具を作って、よりリアルな舞台を作ることばかり考えていましたが、少ない道具でどう見せられるか（中略）ということも大切だなと思いました。」（2年生。Y.H.）、との感想がある。②について、報告者自身は「発表で何度か同じことを話すうちに学んだことの理解が深まっていくのを感じた。自分の行動を見つめ直す機会にもなったし、それに対する同級生の意見を聞くことができたのは大収穫だった。」（3年生。M.A.）、また実習を直前に控えた2年生は「来年は自分たちが発表する側に立つと思うととても不思議ですが、来週からの初めての実習を今回の実習発表会で学んだことを生かして一生懸命取り組み、後輩達に伝達できるようになりたいと思いました。」（M.B.）、と感想を寄せている。④の子育て中のお母さんの話を聞いて、「お母さん方の話を聞いて、子育ては大変なのだというのを改めて実感しました。日々一緒に生活し、ずっといるからこそ子どもをかわいいと思えなくなってしまったり（中略）そのようなお母さん達を支えられるような保育士になりたいと思いました。」（3年生。F.Y.）、「保育者は保育のプロとして、母親の相談に乗り適切なアドバイスをして、一緒に子育ての悩みを解決していくべきだと思います。」（3年生。K.N.）、との感想がある。⑤について、「今回の発表を通して、子どもの年齢や発達に合わせた活動を考え、子どもと楽しむことの難しさと大切さを学びました。」（3年生。I.M.）、「（事前準備をしながら）3歳未満児の姿が想像できても、具体的活動の内容を考えるうちに、その姿からどのように楽器と登場する動物を舞台上に出せばより楽しんでもらえるか、登場方法や活動の内容を試行錯誤しました。」（3年生。O.A.）、と感想を寄せている。

こうした取り組みによって、学生は各授業間の連携によって多様な表現活動に取り組むとともに、実習

での実践、保育施設での公演、保育現場の実際を踏まえた講演会への参加、施設見学などの機会をとおして、表現の実際を具体的に学び、深めることができた。これを踏まえて3年目の平成25年度には学内に親子を招いての実践へと展開を図ることとした。また上級生が実習での体験を発表し、下級生がそれを受け止め、それぞれの実習への準備をすることで、本学ならではの実習生像を構築できる可能性が出てきた。

3年目の平成25年度は、本研究のまとめの年である。本取り組み開始時の入学生が幼稚園・保育所・施設での一連の実習を終了し、中心学年となる年であることを踏まえて、学生個々人のスキルアップをねらいとした実践の機会の拡大と上級生から下級生への伝達を重視した取り組みを行った。

学生個々人のスキルアップをねらいとした実践の機会の拡大は、「表現発表会」の開催、大学に子どもたちを招いての「あそびの広場」・「公開講座公演」の実施、及び保育現場での実践等をとおして深めることができた。表現発表会は、2～4年生各学年ごとに行った（4月～12月）。昨年度2年生は既成の物語や音楽をもとにアレンジを加え、大道具や衣装を作成し演じてきたが、本年度は物語や音楽もすべて学生達自身の手になるオリジナル作品の発表会に変更した。学生からは、「台本、音楽、衣装など一から自分たちで作り上げるのは思っていたよりも大変で、発表会の日まで不安でいっぱいだった。」（N.S.）、「劇に関連するものを導入としてそれ以前に経験しておく、スムーズに劇あそびが出来るのではないかと思います。ダンスの練習は保育者が前に出て、左右逆の動きをしながら説明する必要があると思いました。」（R.F.）、「事前にシナリオを作る前に、劇あそびのテーマや世界観について子どもたちと共有したり、子どもたち自身で考えたアイディアを出せるような活動が必要かもしれない、と思いました。」（K.T.）との感想が寄せられている。3、4年生は、パペットシアターを行った。一人一体のパペットを作成し、グループ毎にストーリーを創作し、かつストーリーに適した音楽を一人一曲ずつ作曲した。パペットを演じて魅せることのもどかしさ、音楽や照明、小道具を効果的に用いることの難しさ、狭いパペットの舞台を協力して作り上げるための気配り、目配りすべてが集結した発表会となった。

「あそびの広場」では、大学に子どもを招いて、輪投げ、ボウリング、射的、ヨーヨー釣り、おもちゃ屋さん、迷路遊びなどを行った。学生は学びの一端を次の様に述べている。「興味を持って積極的に関わろうとしてくれる子どもや、慣れるまでに少し時間がかかる子どもなど、それぞれの子どもの性格をきちんと理解しなければならない」ことが分かった（1年生。A.M.）、「いろいろな年齢の子どもたちとふれあうことができ楽しく、学べたこともありました。それは、年齢によって遊び方がまったくちがうということでした。たとえばわなげの場合、1歳頃だと投げるというよりも、輪を置くといった感じでしたが、5歳頃になると上手に投げることができていました。このようなことを目にとると、その時々に応じた遊びを用意することの大切さを実感しました。」（1年生。M.O.）と。また、乳幼児から小学生までの子どもとその保護者を招いて「公開講座公演」を行った学生は、「実習やボランティアなどで、乳幼児から小学生までの子ども達と関わる機会はありませんでしたが、保護者の方たちとここまで密接に関わったことはなかったので、これから保育者になるにあたって、とてもよい経験ができました。」（3年生。S.Y.）、「託児の時間では、保護者と離れる際に泣いてしまう子もいて、子ども達とその保護者に『この学生にまかせても大丈夫だな。』と思ってもらうことと安心してもらうことが私達に求められているなど感じました。」（3年生。M.B.）と感想を寄せている。さらには、保育所を訪問して体操や劇、ペープサート、パネルシアター、影絵を実践した学生は、「子どもたちに向かって分かりやすく説明することや反応を見て進めていくことの難しさを改めて感じ、実習に活かせるように復習・改善しておきたいと思いました。また（中略）保育所の先生の姿を見て、子どもたちの前に立ったら、堂々と胸を張って笑顔で話すことが重要であると改め

て感じました。」（3年生。K.S.）、と感想を寄せている。

このような表現を中心とした学びをさらに深めるために、柔軟なアイディアと豊かな表現力で観客を引きつける「劇団風の子（東京）」を本学に招いて、公演とワークショップを行った。学生は、「注目の集め方や身近なものを使つての出し物、身近なものを見立てる方法など、保育に必要である技術や工夫がたくさん見られ、こういった工夫や機転、柔軟な発想が保育には必要になるのだと改めて感じました。」（3年生。R.M.）、「ワークショップでは、いかに演者さん同士のチームワークが大切か、実践も交えながら教えていただきました。人と人とのコミュニケーション、そこから生まれるエネルギーの大きさ。（中略）多くの感動と発見が得られた一日でした。」（1年生。M.I.）、と感想を寄せている。

異学年交流をととしての体験の伝達と共有を図ることを目指したポスター発表形式による「実習体験報告会」を実施した。報告をした3年生から「発表をするに当たって自分の実習を振り返り、注意点や次の課題を明確にすることが出来た。」（A.A.）、「2年生が発表を聞きに来たときは、全部が不安で分からないといっていました。私も同じくらいの時期に同じ感じだったことを思いだしたので、少しでも不安が和らぐようにアドバイスできることは一生懸命伝えられたと思います。」（A.S.）、との感想がある。また2年生からは、「授業では聞いていたけど、実際に実習にいくとどのようなことが楽しいのか、どのようなことが大変なのか、学べることは何なのか、など詳しいことを知ることができました。」（Y.I.）、との感想がある。上級生は報告会を通して自らを省みるとともに、下級生に体験を伝えようとする意識が確実に育ってきていること、下級生は上級生の体験を聞き、知ることを通して実習の様子を具体的にかつ身近なものとして描くことができるようになってきているといえよう。

なお以上の各年度の取り組みの具体的様子は、各年度毎に編集・発行した和洋女子大学こども発達支援コース活動報告書『ふれあう おもい つながる ―まめやかに動く、うれしい先生をめざして―』に詳しいので、あわせて参照願いたい。

#### 4 研究の成果

学生は、各授業間の連携によって多様な表現活動に取り組むとともに、大学祭等の機会に実際に子どもを大学に招いての体験的交流や地域での発表会、プロ劇団の観劇などの機会を通して表現の実践を具体的に学び、各自の体験を深めることができた。また学内に子どもたちを招いて、ゲームや物作りを楽しむ企画・実践をしたことにより、多くの学生が実際に子どもと体験を共有することができ、座学を実践へと転換・応用する機会となった。複数学年合同の取り組みとしての実習体験報告会は、同級生間の省察に止まらず、上級生から下級生へ保育の場の具体的なイメージ——子どもや職員、保護者との関わり方、実習前の準備、実習中に指導を受けた内容や今後の改善点、実習中のメンタル面を含めた体調の管理など——の伝達や異学年間における情報の共有ができることを示している。これら各事項に対する学生の意識や実践の深まりの軌跡は、上記「3 課題解決に向けた取り組みの実践」中に引用した学生の感想から見て取れるところである。

以上3年間の継続的取り組みにより、授業間・教員間・異学年間の連携の仕組みを構築するとともに、①より実践的な学びの場の拡大、②学生個々人の生活力・コミュニケーション能力・保育技術の向上、③明確で具体的なキャリア志向の形成、を図ることができた。特に地元市川市をはじめとした幼稚園・保育所との連携や保育現場での実践、それらの経験を多くの学生が共有したことは、学生の体験の質を向上させるのに効果的であった。この効果は、これらの体験を活かせる幼稚園・保育所等現場への就職率の高さ

にも示されている。

今後は、この3年間で構築した情報共有の仕組みを活かし、これまでに制作した様々な舞台装置等を利用して学内外での実践の機会を広げるとともに、さらに身近なものを利用して自ら課題解決しながら体験の幅を広げる取り組みを進めることが必要と考えられる。また新たに、幼稚園・保育所等保育現場で活躍する卒業生と在学生との交流を図り、現場の実際をより深く理解し、考える機会を設けるなどの試みも必要となろう。いずれにせよ、今後いっそう教員と学生、保育・子育て関係機関を含む地域社会との相互的な関わりを保ち、深めながら、「人に対する優しさと専門的知識（教養）、まめやかな心遣いと行動力（実践力）とを備えた保育者養成」を行うことが本コースに求められているといえよう。

## 付記

「人文学群心理・社会学類人間発達学専修こども発達支援コース」は、平成26（2014）年度から「人文学群こども発達学類こども発達学専修」に再編された（入学定員70人）が、「人に対する優しさと専門的知識（教養）、まめやかな心遣いと行動力（実践力）とを備えた保育者養成」を目指すことに変わりはない。

関山 邦宏（和洋女子大学 人文社会科学系 教授）

（2014年11月11日受付）